正史
奚傳

# 小說叢庫 十

へ13
4307
16

# 正史博いろは文庫十六編序

僕年来文学の程人。いろは文字をて
抄録し恥を忘れ義堂の結の年
新しきひとつ。ちゐ大方い繻り
ぬるをわかよたれそつねならむ
あるぞ。例の戯作。河竹黙阿弥作。

へ13
4307
16

2
250
16

早稲田大學圖書館

16194
<2000-352>

情ひ仕る延引よ濃くれて
文章の文るゝ程ゝ
兼ゝ安ぶ濃てハ思ハ梅よ
足を
小ぶ浮世ぬ世
徳を

いろは四十六ロノ一

ひを有るとゝ
遠を隔てゝと書房よ
徒き雅でゝ酒房ゝ
冷ゝ絶ゝ池ゝ

作者 春水

色秀は前名九十郎と
喜多三後ふ改むと改む
あるの天男へ適大井川を
紙ゆるる新舞妓役者沢
川紙
大井川
で思に
難云と
ちゃけ酒
まとめより
ちんとるるぞ
又遠られ

色秀場へ入て力の柄よ
まを抑しが力の一大事を
思ひ逆し金五兵を繋ふ
吐くてその場を去るふ
夏真の大丈夫と云べ

正因ハ討入の夜母の
記念の白無垢を着せ
と云ふ漢の樊噲の昔も
恥ぬ忠あり孝ある人と
言ふべし
女房音水
富折
助右工門
正因

正因
母

牛ヶ渕にて光風
妖怪を捕る事
次編の本文より

失間
新六
光風

正史
異傳 いろは文庫巻之四十六

江戸 爲永春水著

第九十一回

偖も和七八偽八か紫の雲く体を清宮てうち張
ひ八を偽ふ周章ふるめ見偽八が追つけて色仕く
を交と知らずど偽八も心あぎのぞらる偽ふ色を
楽めて性うる知る高の屋下日もくやへ入る酒
時ふ祈しも四辺ふ人も来ざれば天の窓人と悦ぶ

和七寛ひ寄ツ渡ろより拳を突めて寒出を急而の
為分み猪八八何ろ入りてこ為るべきウント作法作る
を為を弟こうと子思のツて猪八が懐き例の残茅を
奪やり紙をるこぞりて迎えそうしが蕾嗜りの変
ゑれべ幸ひみて人も能めぞ絶ホその場を迎迎び
て相生町ふ色り出れ形て又会歩ふ対面ゑ行し
抜ろ式出居りしく伴の書状を取出一対をえ
ゆ〜と抜きそるふ



紙れ中迷れ蕾て間こ形ち猪谷渡人く
抜ちを出ぞ宮ふ抜ち第大屋幸を
山猪伊勢幸ころう出ろと清紙しまが
抜谷家し渡士き形こ猪張殺ーれ面く
何ち言退中ろ人も有ん
山こし忍きと形ち百報知い新しとやこれ
形又雪変抜ち出ーこ通渡後ろ中こい
何ろ元ぞ雪用の猪ぞ抜ち元め人猪ん

忠義清くそ

十二月二日　　荻井備作

## 松原左仲様

ト清ようの二個ハちち張きくる中ゆゑ五文清ハ此裏ハ
はき　五　イヤちちう形ちうのふ文ハのちちう　ゆちちも遠も
あらゑのゑのご様　黄ゑのそくられでけ去様ハ　松原と
中らの毛ふ海ら　ゑいせんよ遠方へ夜物ちうハ天左
拭ちう　右茶を懸ちゆゑ　ゆのぐらり　ホ　二結ら



ぐちうの子工夫ハ備作とうの如ハ師恵の関若ふ
てゆる夏ゑの夏酒遊をるとうふ夏ハ元若のふ味
ぐもゆぐちう文か業や備ハがちの師徒をるとうふ夏
も備く動付て居くちうら若やと思ひて元ゑを考る
のぐ家ふ祇の助けサ　五　マア何ふ者ても　けを義を大量
氏の出発ふへて　けちうくの出発恵を何ふが宜ちうら
ド中ゑちう　和　文ハ書ふりの夏ぐぐ文　けちうぐと考へて元を
那備ハぐ大事の毛紙を夜らまち夏を左仲がゆ

こゝらの紙の色の心事猶へ分解あいでも備作から
大意ふ初らせてよとてこのへ何ら手紙のあつ変ふ遠ひ
あいと形角おゝ由汐を為ることろ紙えとう敬意
用心をさまでもそうと中とを遠る形くふあるでへある
まいつ「ある程とりやゝ生ろの言ふ毎りぐ今とあつく
用心をさせまいゆうよ考る立文も何るまいどやゝあんろ
文とも他ふ妙汁でもわまび言ぐ「妙汁と
言めでへまいがひ手紙を直くかえるさん亦地あいさん



由あるへ人ふ中ふ切くくの心事ひと除ける中とあ
ひくくの字をびちの字ふ書くの手紙をの字ふ
出遠ちと亦地ふ人も知へあゝひ上ち心事と
除ける中と懐ふ中ちぐろう新ら手紙をこの
毎りふ対ぐて絡八よ返くて書ると方仲がこんで見でへ
安心ぐとのよくゆ汐をもるへ必定ちふ人附近で和宝
を遠ちら首尾よく成就高ゆうと思ふ中ちて「寛
ふ見へ妙第ぐぐ保ひ手紙を絡八とゆらよ返ちのぐ

金槐はいかゞ爰さうゝ行ざ子エ
さらか安事ゝ
あいとこゝ方後ゞ出来ゝ
出セうトらひゝゞら取来を
云ゝ出ちゝ神仏出来を感納ゝ
墨ゝ通ゝ出セ文ゝ
どくゝゝ
こらひゝ



又花へ四月ゝ
言られて和ゝ
とゝ
通りゝ
和ハ行の行ゞ
花ゝ
ゝゝ
ゝ
ゝ
ゝ

五兵衛


反間の智計
和七容昏
加筆
和七

遠めて作り出く給るべしと云ふ毫初らねか業へ響い
給八をのそ備作よりの書状を送越べ翌日かるべ
左仲が作より屋き紙れの書ゑ一今年へ折ごと
ゑ給ー給ー先ッ茶行ひか酒買ふて和七が所らべ
側の屋り濃をわるふ乗ーきんと資様へるごーつる
給ども和七へ所り茶ど那極ふて巻ゑ屋きへ酒
つて茶やり書へるが支ども何れぞよ回白い宜ども
出来て給らねのと獨り氣を揺て居るところへ

勝手はより給八がのうちに氣よへり来しが接拶
もそそ給ゑて酒屋つて居る仲をか業へそろ
呼ぶ茶ヤ給八どんか茶ヤ給ものり送へって居も
云へるいそ居るらるい新を作てか在ぐ焼物でも乗
いのう又へ何様ぞか高の人定めて松系作がか新び
ぞ私の面るかれぞるか茶ーの人アレサ兄さ言て居へ
分解ゑい私も多く他よる氣の揺る夏の何る有ぐ
ら乗て性ーてか性ものト言ってて潮ー新をあげ

結
イヤ家うか前さんよお目お覚るのも酒目あいゆうで
どざんすもそど寝ふとんざ目よ遠まる
第五。とんざめ
云何指いの目よ遠つるのざえ
結
弱べサまてか寝ろ
ヒ先刑しい目を出て私系指と名いで強く途中
高指のか長屋ドで強ども知まで落ろうら私よ
前方をうるもと考ぶ物りまうらウント言って作まる
近い見えて居ちうぶ更うらえ他で美中のゆうる心指
で居ると頼ての変よ美くで私の名を呼ぶ声が早く



近へて、私が付てまると私の国で出屋の彦が大勢
来て水ぶの金ぶの宝ぶのと騒いで居ろうら指
ろを変ると私が住業場よ作まで居ると近所の人
が見付て問へ何ぶ出でるとこの他まで居るのざと
云ひまるらヤ嬢ーや食が助ろうのうド男のよ乗て
猫ってそるよ銭布がのうまでんうら所を洗って作る
の指ものと性ー中の鉄金へ塗方がものが大事の
紙をへて変るの作ってへ頼まるとへよ海あいと

言葉のをはて出屋の若もの
きて見まして是あるさけもども彼岸と時刻もさて
文どれなり主組者よ為て居ようて張もあく塗紙の
行方へ粧初まぢとうて文を組者よ居さ知ぢどんな奴ぢ
者と文ぢう形風俗をもえ留て色ちいのぢうら捕
出て吟味をする者もあく実よ私へ言役の者ら結
ふがつり者あらぢはを文をおあんよ知ぢせちう
さいぢ源あいと思つく孤出して来まし



なんきりる藤みめ逢手うのぢうら云ひ出ぢくるて
居りまうとうよみお蔵へ捕りて
みを文をお者ぢ子工どんみを文ぢ書て なりうる知ちいが
大変ぢで 紙ったやうふ私の組へ云ひ来て居ると
何を一大事を知らせてとうて遣ひちいのよ文が
居りちいぢ松原拍の巴の紀ちうへ来り第一きさ
組手紙ぢ何拍ちいよ俗をで 堪茶屋人のまみでも遣
のうと拍の文不拍合ぢうら宅ら一通手て居りうへ

出来ぬ事なれば是非なしとて
の行末を案ずるより絶えて久しく
みの仙人の文をおもひ出ずこゝにて言はれて
面白おかしくうれつる天竜を捨てより和さみ
須臾回答もならざりけり

第九十二回

徳の和尚臭せると和七へ者どを殺しが猪八が
者仲をうて業和七へ思へり



第九十三回

和七か帰りて
思へのかの遠ちこと子エ
法の遅くなりしとて
えんかえんの子何程ぞ渡るる子
和でえんえんと思ふ通ひしと
こそ何程ぞこゝへと問返されて心苦き
えい変でおかしきのらえん法サ
高かや何ぞ新の面と変りて

第九十三回

和七か帰りて
思へのかの遠ちこと子エ
法の遅くなりしとて
えんかえんの子何程ぞ渡るる子
和でえんえんと思ふ通ひしと
こそ何程ぞこゝへと問返されて心苦き
えい変でおかしきのらえん法サ
高かや何ぞ新の面と変りて

心配な事でもあるやうな男ともるヨ心安くもる私よ
偽りなさるのハ怨こゞ候私らハ何ら
思ひ出の知く心ゆるの仮りて知てお話ものあり
大阪せんから私ハ一寸茶湯くでも遠へつて
参りやうとハ蔭の方を風目ろけ気をもる
ろくろくとそれバ茶アレサ何もか者が居て話ざと
ハ夏でハ色ヨ金作俗八どんゞ悪のヨ係さゞと
ひるをやうをやうまかえひごろ山人くるく



男のゞ子夫じやア私が嫌ろかヨ
俗八さんが今ゞ途中で銭布ハ
イヤア夏ハ大変な事を者ろくさんを
遠へて居るの人 俗 十三ふ三が五ツくて清ル七
八百も遠へて居ろ和 夏じやア何ぼでも
そんなよ品廉らく思ひて居る夏もの花蔭
ーを者ることかりくバ豆ひどやアるの 俗 十二銭金ぜり
ろら藤やア者ませんが三銭和の中の大事な

手紙をへんとうの紙所へとうらいをくんお
何ぞ源さまへ行ぐらら文でこんなお心配を書
きものサトこよりよ和せいらい書ぐ和やまか
嘆ぐ思ひ出ること変ぐあり事を今私が和生
所ら始りぐけふ手紙で報を懐こと雅この男が
何ぐら紙布のもうみ面を懐こら出て中の残
ぐらり出て行の紙布を通水の様へ投りもむ
のを用の時りぐちらいとこあるこぐ新のまこと



拾ものをこまの男も氣づ紙ぐなりてこと拾ものをして
横所へ逃逃て仕舞こぐ第一お前の所らまこと紙布
ぐやゝまつくこと知らん 結 ハテ子文へ母よりみか嘆ぐぐ
そこそこ紙布の信掛ぐ出ぐ知ぐこと在おさ
ぐ人 和 エ夜の変ぐ出ぐ事を置こそこのぐ
ものら信掛まこと人間ぐんぐ投ぐ濡こそ
ぐ人へて拾こらもぐこと思こて何こぐら待こて寄
こお先こぐ人 結 方信サ子工何拾ここ拾ぐ新ん

葉「アヒ」ヨリ 伝八どん 考へて居る 和「どやアなるか 大事の
手紙じやアないか 出でも 引ずりがなるならもさで
も 仕ようとまうぐ 豆ひハ子 和「七さん 投込でこそと
知つて居るから 伝吉 ぐらい 居るよ 仕つてとる
事 和「ヨリく きてもの 和「どこいまこそらうあり
ませうとも 伝「 和「 どやアかう 言の 義ごけ
かう言ふ さるう 十二 言の 毒も 何日 のるうの やうもまれ
で 伝八さん 藻の 中を 探せのごとく 桃 行を 二人が



きを 張づ 拾つて 枝の 弱いやうな 物を 一本 拾ひ
ながら 豆ひ ビト 紙ホ 二個 仕 交 潜へ 和「七さん 紫 問ホ
伝八 ハ 生 所 の 方へ とりく 伝「 和「七さん きぐ 先 う子
和「 方 伝 サ子トホー 考る 振 をして 和「 エミト 向 の 撲
所へ 逃 めんぐら 何 でも 交 考る の 藻 ま 遠 へ 和「 ト
言 ともて 伝八 ハ 藻 の 端へ 桃 行 を さ 入 て 振 方 遠
方 と 尋 ま うぐら 伝「 ヨツト 入 ま 和「 あ ぐ う 子 伝「 イヤ
大 目 遠ぐ 背 を 打 て 棒 の 先へ 引 ま け ぐ う 紙 布

欲よ
力を
ぢうれて
香る
さくらさう邦
傳八

和七

でハあくつて古紙を練ごゝやうサ
ひさうち 和七ハ懐より例の紙布を取出し 俗ハの言の
付ねのやうよ 伴の濤く投やこを見ればもとも
神を伴をあつこのぐら 和 俗さん 爰よ 何ゝ わるゝらを
樽を拾て来るせく 俗 ドレ〳〵ト 書ひうぐら 祝 竹の
竹よ さゝ〳〵 俗 遠くれくとりやア和尚のやうよ
和 爰ゝやア 吾 何ゝ 竹りをゝせゝらか 新 樽ぐ
百ん ゝせくトゝひつ 祝 竹とう 出ゝ 俗ハハ 家中

して樽の出ル門 和 竹ゝ引揚ゝゝ紙ゝらも 海の 俗 賀雅く
書簡の紙布ゝ 新 ゝとふ小ゝいゝくゝゝけまゝでも大ゝゝ
手紙ゝ 遠ハて 吾ゝゝら 見ゝ紙ハ ゝとゝゝゝのゝ
保ゝゝゝり 濤の 水ゝ 濤をゝゝら 樽 和 おらゝく
俗今 濤を やりゝたくゝのゝゝ 和 ゝ俗
ゝゝと 俗を ゝいやゝよ 特ゝて 帰ゝて 軽ゝゝゝ 宜ハゝ
文ゝゝゝん ゝれ 大事ゝ 手紙を 俗よ 事紙ゝの
ゝゝ 俗 ゝ 和 ゝゝゝよ 濤く 保ゝ

さいごやうらう名俗が見付て初らもざる所紙屋
さる 文も書うサウ宮い他人ふ咲の出来ない
紙ぐが出る紙い花落うら来るのでこる指のお屋
要の松糸左神さ為へ書ふ掛けるいどやアるうい
ハサ 文ゆ何う図絵の内有とうへる子 マア
きんな紙ぐらう ハン 熟くさる子図絵の変どやア
定めてどう考うか紙ぐ わるぐらう紙こる書絵のえ
外紙ぐのうう紙ぐ 土産合の礼の



業ふ書るとしふのでるもうぐ何を書てるか茶のお蔵
で出る紙ぐ書ふ遠へいこのぐうら三図絵ぐも買
やうト咲ーうぐうふ売り年どふ新てお業の家
いくれべ紙ぐも書うり出ふ業ふ 第 何指ぐく
新きうく 四 安仁うきうて下さいり 宜 梅之
元紙りまうこうら指ぐ業りまうこ 文ハ宜うくこ 子工
見とふくめも 和七の ふ蔵ぐうら宜くふ紙をふ言ヨ
和七へ列て出書業ぐうこ子工ふ新ぐ宝うらうと

思ひくらら濁長舊と拵へとか綱を付けるだろうおし
てなるヨ　扨へ宵綱へ金ぢいまくこ。サア猪八さんお
前も長くこらくらくらら史井の例へ寄んの七人へ猪
扨へ此手紙が手よへこらへ使こらも速く松五郎へ
持つて帰り長七郎へ渡と五郎さんよ濁まと五郎へ拵
雲いくらおしかと拵まして乾うて帰りま
ちうと併の手紙を永郎一史井へかぶそわぶるを
見て　一ヲヤ文でも濁こだろうで対トもう被まこうこ



うら豆こうこ子工大御よよぶ乾いくらどんお意見ぶう
知まこうこ蛙こも乗く布けて進ぶ豆ヒヨトこい
まて猪八一緒不及ぶ生乾き七書状を携へ
松五郎へ郎こうが何こうこ濁よこれいこ牙の
意思を叱られて癪美の形よりりやせんと
ようこ見て変まで考へこうべ見まで拵いて帰る途中つい
水級りへ取蔵し濁らセーよこうこ拵ゆれべ左伸い
雑ふ心ゆけまべ濁こうセー変を碧ゆセぶ計まこう

[illegible]大星の伊勢寄宮より東西へとひろう
[illegible]邸谷浪人の家地あり一個も居らざるなかれ
合点の事なれ変ずるばかりは心を用ひずして備作
うらうらと送りうらびさのと言葉をてよ事のなかれと
[illegible]人[illegible]ものと[illegible]と[illegible]用心を第一
[illegible]べきと大星の松屋五兵衛の[illegible]の[illegible]
かの和七の[illegible]の[illegible]紙の[illegible]を[illegible]
[illegible][illegible]を[illegible][illegible]備作と



[illegible]の[illegible]の[illegible]を探索して[illegible]
[illegible][illegible]の[illegible]
[illegible]の一[illegible]の[illegible]加筆[illegible]文[illegible]を[illegible]
[illegible]を[illegible]を[illegible]の[illegible]
[illegible]を[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]月十四日の[illegible]

正史
真傳 いろは文庫巻之四十六ノ

正史
真傳 いろは文庫巻之四十七

江戸 爲永春水著

第九十三回

備中極月十四日の対八の疾みいろり御の八百や
伯八八に辺で出るといふ声よ強き笑ひ紀出るる
ふ近所ふ出の手もとくもとも高の面安の内と笑
く泣叫ぶ声対合の物音最も高く吹ものるよぞ桜八
姫屋浪人の疾対ふ礼へ出るん第て左仲ぶ云

何ぞ人屋敷よ莫のなりと唱べれば祝儀の出屋敷行く
酒進ぜよの者もあるべば皆夫楽く酒進ぜべ
一帳の饗美もならんと亜指茶軽引揚て一のく
さんか近出し三所ぞりも行しと思へば黒裝束也
武士ぞ急地に人現ると出て前後左右か立寄り
武士ヤイ待て待て言ることてあり待八ハ待大地よ
平太張て出発ぞさいまし何ぞれ発ぞさいと
らふらふらへ胡乱み奴ぞみ一二〜全く左指み

若ぞいぞさいません高指の出門前か住居を捜せ
八百屋ぞいまも武士居ハ何とやも武士ヘイ待八と
まりしまも武士主又八百屋ぞ何へらぞ〜何ぞ居る
のぞ武士何処へ行くのぞとらふのぞ
何ぞぞんまも。ヲとれ〜邦田の市へ買出か
居りまも武士居屋を云へ弱市へ行く出人別指も
何ぞこりのぞか何時ぞと男のまぞ高庚申ぞぞ
縁か買出か居るみ壁蓆籠でも前いで

社きそうかあるごのか宮まで社くとへ怪しいぞよ

（イ）ユ。十二義も問屋か部けてどざいまを史かがし

武士　何れ者ら

急ぎの品を注文されまーこうら

疑はしい箱の陽く候　費用で参るとりかを

暑留るも如何成神田の書物問屋まで出方

どもが送ッて参へそうい

（イ）エナニ史かへ及びまをん

武士　イヤ生方へ送られぞと宜ろうらうが出方か

不安ゐを変がなるうらぐト四ゐ人のうち女人が



僧八が左右か消ひさうく来をと考がをかぞ

男ひげけを紀人か送らを社く不へも社きがくく

是邪ゐく神田の多所かからう海を之の問屋を

呼び紀し門ゆさを田か送へをべかの女人の

武士も俱か見世先へ進を入り　武士　此者い此家か

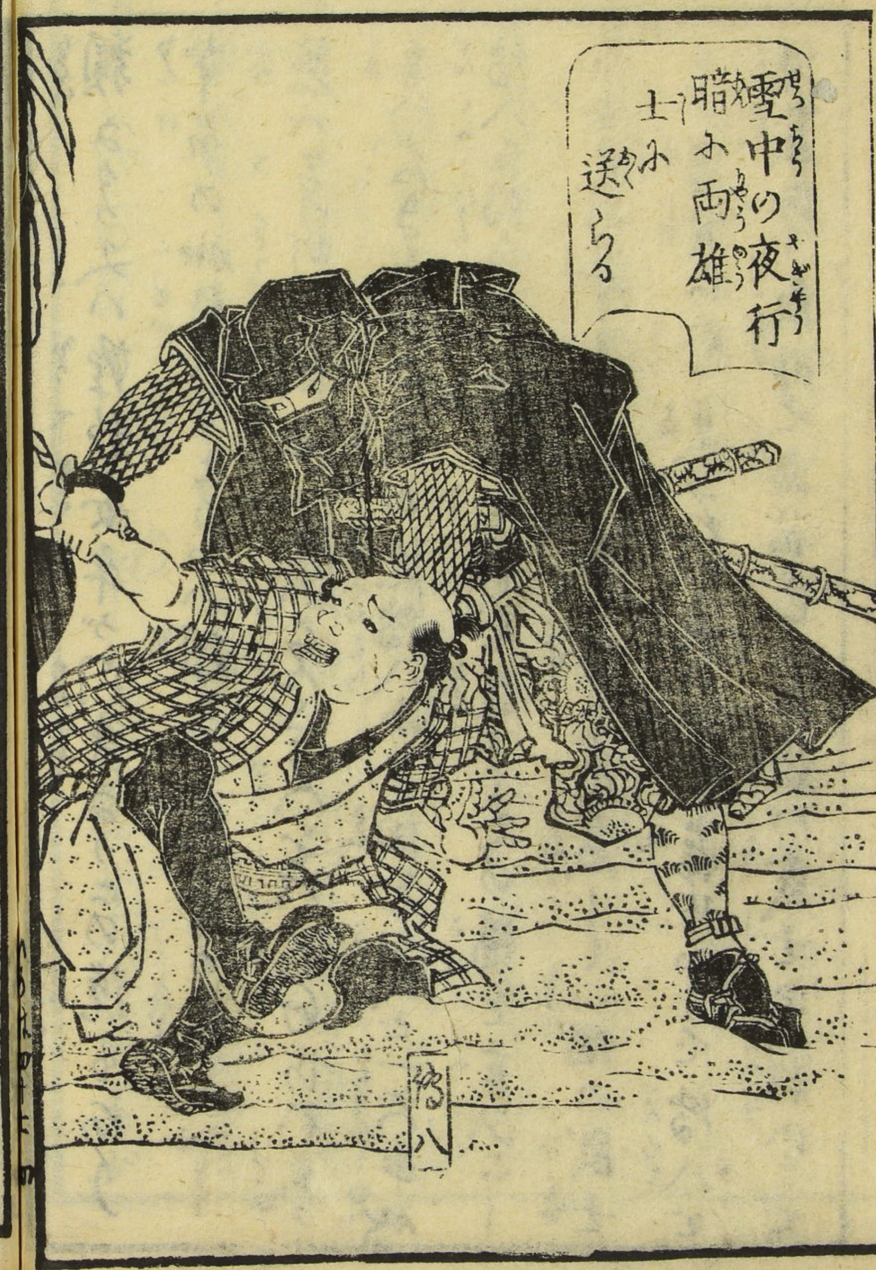
書物の買ゆ手ふ考ゐと生ぐ生難しいふ細ぐ

何る度態く我こぐ送つて来さをべ夜の間へを方

夜へ様と紀け生くぐ去夜の明しうへ所方へ

遣さるとも猶ほふるさが宜しうご座の間へ張書して
門に立すも出さを変へねばならぬぞと事を細しく言へ
ば直て二個いとの作を去りける什麿傳八とさく間
う黒紫糸せーの若どもへ見いつる華ありけん
張ふ初編ふ充せーどく武士対へのわし付黒紫
糸をせーの高の座変の世方を固め豫者人逗留
の備代みて武士の者武を取し変若大星者ぶ社
頭ーの二の間を対へと招しとふ裏壁ゐる盗者ぶ

頼みるる又ハ堅紙安平ぶ門先ゆうとの流ものり
本氣の加勢ありとものいふ何まぶ見みる者かべー
若べ多町の間屋ゆてへとんざ人を呼ばけられ寄
を人へ大きふ心を痛め先傳八ふ細を問へど一大事故
傳八も明白ふ作を語らぬ程よくその溝を言へとー
ふ西を呼べ事を出ふ実ふ男へども変しく二個の武士
より言分られー変ゆれば座の間へ寄ふ出て傳八を
張書ゆ座明て出ーりしとぞ結べ義士者礼へーて


暗中の夜行
両雄
送る

陣屋に対面ありて高の家名断絶これば結八に大切
なる出入の商売を失ひて亜業おそれ
ばく多の出費
より断く間が悪くなりて永の大病を煩ひ世渡る
夏のあらざるより終に食とりなり居路の外を
ヒーとなふ偖まさか業に高と思ひ和七八郎士の一人
あて本名金物金助と偽称ーお願くのなるか業ひ
夫が世ふかる時より富の商売の金えをして是くの金
代繁迫ーふ此変の騒動より商売断絶ふ及びーなべ

是迄幾くなる金銀に一文たりとも無き事なく金とそも
銀ぬきなる自己が金とはふ人のらでその中に第者き
金をなどを引出ーて口入なるる夏などの玉代貸方より入
繰く使られ是非なく商売をなーて名義ーか
蔵ふ色ーが終ふ和なる人果へ如何なる死を
遂うけん建方知ぬ色ぬとうん基はか業い身行
堂うらぬ夏ーて家産なと為うしが
死ーなる後いうち晴て例の和七なーくなる男安ふ類

セーガを殺人とうく彦ふ門へをそうく高利の金を
貸て他人の難儀を顧ず強ふ用捨なりしのそう
松茶屋伴ふ牧生れて出へ屋敷の京とゝらゝど利慾
のくるふ強くふ義士のかたいとさるそびんと迫文るの
信悪男ふ殺ひて彩く悪蔵あーらうゝーひとり
藪丹備作のを作ることを紙定ふ知らゝど柴ハか業
の親族ありて出郷もあり紀州出より饗美の殺さふ
岡若とあり宮茶屋三ふる大星学なる文ふいとと



因逐セー殺ひのあらで思べきろ結八か業が分の終りふ
引籠べて家のひとるふ行末業へんゆりハなるまで

第九十四回

若ふきと義士同盟の一豪傑ふ近松諫六と云者
なり墓へ紅若の産ありしが後ふ堀谷家の臣となり
たるそのふ仕ふ墓三郎と云又是稀なる名優なりし
若ハ堀谷亦滅セーて孫六ハ浪とセーより頼て京ハ走
ア保久町の貧産貴ふ住居夜清助と変名ーて

歌の横手式揺り居しべ折しも極月十二日ちらつく雪の
門にゆて今別仕舞し新をべ嘉三郎がなくせくと夜庄
附て居る紙く年廿二十七だりあてれ像立て美しき婦人
川風の男女を仕不法さ出て第五の表八と云へるが笑あく
高ぎら「イヤ嘉三さん色の為が傷出して来中さうく例る
おくさうに紀あさる子。トキ二月廿八日箱で寄へ出ると言の
を見返る嘉三郎が書くしき新月めて嘉「イヤ廿八日八
か立花ぎが此所色の義日ホ箱ぎホ揺ッてか立



おさるか深へあいら今日八帰て来ると来な
さん「そりやア嘉さうでもありやそうが出用事のか中をもま
るとあらもる結ぎいどぎいきん一寸出用ホ新うう人
もうべ宜のざうら何指ッ見新人を「あらあいヨ
此指孤めらが廿廿少しか箱ホかを何ぶ落付ると
男人ば出指て来て又化して傷ひ出そうとしても此
嘉三がか附ちして居るうちへ奴等が傷を大変の
廿指をさまて居るりめうー服廿まぎ廿の大声を

雲ふ五さく（孫六が味方）門口へ立出て「誰ぞと思ひさ
ら表へ（イヤ上野先生様）極重ねうございまして今日へ
物ゝ法でふ家さんの出借をしてさ近所まで参りの
まつさら一寸書中のれつえ為ふ「文へよく」来る
筆をて厚あいさつ〳〵遠方によろず宜ひ「へいくたく拝
ゐられ先ん方へ。さつ〳〵小家さん上野のお母さ〳〵が
出さつら主人忠へわく大びらでお這へんなさ下る
三を風呂ふ熱まづらお家と煙ふ多く毒を墨三帛も



亘人の義四人さまぶふさく止りて獨り何はらはの中
あてぶつ〳〵地言を云ひあづらお前の新を先分て
毒ふ毒ふ孫六撫嫌よげふ「宜く家て是つとノウ
変へ宜ひう今門にて何を云合て居るのど「へイ。十二
例の悪義先生ぶ「孫うう国ると奴ど候何奴へ
悪悪いどかりて家ふ毒のあい正悪ざうら何を云
四一ゝ乳ふ熱まづら宜ひへみと云へあづら紙ふ悪紙
を主ゝ通さらく〳〵と徳め墨三帛を嗅んで「大義あづら

なのとぶをんぞうの所紙の所紙ぬで拭て捨て返すを取く
来ぬを恋のそなぐ変でもあいうら他ふ手紙の風
てもなるあら居者りをして隠分遅く帰りても大事
あいうら渡りと高て来るぐ宜ひト言いきて書こを
かし考へ〳〵イ代用とこさいきまれば使ふ手紙り
きこうう私の居あい留ふ又は弥物とすわたぶら
かされとむぐ金でもかぎひあさらあい拾ふ旅ぬし
世るへ前要ぐと出りして稽いで居りきものわ物何ふ



ぬ渡笔でか天竜の指まぐあいときりしきしてわしへ
ふらんべ手のこるぐ宜しうございきせり 注 宜ひハか何も
心配ぬへ及でねうう注って第五一と言ってれ七ぬ指ぐ
墨こ原ハ濃くうぐらこ元ぬ」が再びそ筆へこ元戻りて
是指こ何ぬ酒を召よるでどざいきせりが和へ
出て降るようか箱のこ方が薄雲氣ござんきせん何
あら私ぐ注ぐけふ云付て来りきせうう 注 結うヨノウ
実ぐハ酒と他ふ者を三和ぐうう足指いせて来ぐ宜ひ

長ケイト言ひあぐらい徐まより酒の肴を次の間
まで運び出し酒さへ来れば付めても銅の出来る様
徹し立きき作の子笠お赤合羽置溜分と出て行く
後を表八が見送りて一寸でも宜く気が付て出酒の肴
奥迄出して進ずるらい有まらい徐「何云ふ家
主の奴ざうら出つて居るノヨ他是で居ても構ずに
妙な話で小雪を借りて来ると云つたのハ何居しと
居るのト問られて小雪ハ完ふ知ハ
ナアニ子ぬる話と

この紙の裏でもなう主人ぢん私きやア今日根ふか産婆ぢ
なつて作屋町の河岸町を船で来まして居ます
来ふ雪ぢ産り出して来さのでもか産婆がなぶをふ
ありまりさうらを孤で子工喜八どん表
の茶ぢ出るうらさつぱり美ぢか立の多いのを氏
お嬢ぢ苦労ふしを何程ありたくのぢ産ぢが出ふ
ぢとこひ殺て出の紙ぢうらのなぢまを産ひよ
ひお宅をお尋ねしてか留まうら産方がおいが若

お花あるら一すでもお月ゝ無ッてお歩みさるが宜ひと私が
進めてお連申しまさ／サ　小「私きやア先刻なの人が
憤怒と怒ると怒を／とをるらら宮ゝ帰うくさけまを
推を強く言て居さんざヨ今日彩うらゝ味い紙合で
お月ゝ無らまこのゝ変ゝ来ゝ私ハどんのゝ花ざヨ　体「
ある紙見れ妙ゝ紙合ざッさ俵ゝ書ゝ作意町ら家
まで出りたゝ来ゝ伝切ゝ文でなるさト長紙袋ら
郎分金を一ッ紙ゝ捻ッてきれば　体「ハイ有紙ゝ俵見ゝ

体「十二サ郎ゝが蔵でも買ッて長ゝ去　体「去紙ゝら傾きまを
ゝ来ゝさん長郎ゝ紙ゝを宜ゝくゝ紙をまらゝ安ッのトキ二
私ゝゝ彩ゝ紙ゝ見ゝゝ郎ゝ用ゝすぐざいまをゝら一す来ッて
後紙ゝ通ひゝよりまをゝら小来ゝさんへ三間巳郎ゝ
見ゝ長郎ゝでも差べ立てゝ紙ゝ　小「ヨヤ私きやア
長郎ゝを宜ゝひゝ蔵ゝさんどゝなるまをんヨ　体「ホイ見ハ
出ゝをこゝゝまをゝ　体「ハイ来ゝ蔵八今酒ゝ来るら一宜
家ゝ紙ゝ用事ゝなるゝら長ゝ作ゝぶ宜ひゝ出ゝ

「主従四海と唱へ道しるべ」

「なの高名ばかりきこえのゴヨ恵ふ隠ぶ後けのごのめを
更ごらか用事さんが吹言を言ふ義ごすエおく
今の高名振返しをされ申こと吹一のうらふ酒肴も来
きび義八ハ新て頭をつけ気より姑く酒響りお直
ひの難儀稼くなりてもや徹底おすしば程よく
義八ハその義氏伸し用なるありおて立て行く
程い二個ぶ芳向の幸を意つけきびかを入り寄り

「工清さん」

ヨ何ウら清良清じふ国ふ熱っぷきり嘆でもふ芳ん
ごらふのうらを度も人を形んで手紙を通さ変る義
義ごう初ら吉さんのふ一度の通るも移紙ーてふ芳ま
らふのうらどんふ氣を稽ごとふ思ひまふ今日ハ
宜清柳ふ作屋町を来て屋敷がなぶをふうごらう
雪の降るのふ見乃ハ寒の毒でなりまるけを」ども
なんぞり久しくふ国ふ熱ら所在ちてふいで

鮮台ハぬ
鶴のおりしひや
雪の家
小江戸
富貴屋
廿八

陳十八

みるのどやアあいくと云ハどんを釣んで来さのでなり
まもヨ家ちづい変を言ふ指でなりまもが子私の指
置うへ釣くまづ何でも何糸へう面白い面づい立ん
みるのごヨ 浜 さアまも指ともまもまづ何を言ふ
みも前氣の日ふみろて家ちらく指び家行も
出来でちの上笠と結づなつてふ掛ると言ふ籠へ
立あいどやアあらあいので種く用がなつてくら 小 立
籠へい出みるとへ 浜 そんまふ作山ふ所を結さみい

でも置つる 小 まふくく所が濃まゆうじやアなりまもんう
出中 稜ふそんみ変をかまふ言ひみるのごものをか前ちん
の家どやア私が今日第まんぐら何活みふ籠へ立
つて仕舞うふと思つてか在のふ遠ひあいヨ人の家も
釣くまいゆうふ笑どやア私がちんまふ若芽をまる
甲変がまいどゆアなりまもんう 浜 立いまく出立と極
まびかねへみも遠つて帳をを張りで居さノサ
小 月ぐこ子アそして立の釣へでもか出ので言ふか掛りふ

ゑんまでなりまんく　弥
まアあんまり近い所でも
いらせの橋をわたつてゝ長切り帰られまく
なるほどわしでも長切わる夫ゆへあるまいヨ　アレサ
人細い夫をおもうヨ若長切わかれんわ逢へ
まくなるゝら私きやアどうぞ子ヱトおし
逢度ものなら　逢まゝ　藤へ立つ夫ゆへ止
めてお呉なさいな　弥　はゝ分ばかりそれで知らぬの国へ
逢くもまいけまど知つたの毎りの浪人者し

何まこと河紙へろ重取を着ゆけまど一生釣らしてもら
ばらまこまいごろらどやアあいろ　そりやアなるほどこ
なのまをうけまてども私ぶ国るどやはりもんろ　弥　意の
狭い夫と言つてもものごはは分ばかり男でもなるまる
他ゆ宮ゆ只抱を持つとらのの夫でまくべ長ら
生涯夫夫とらの男をとゝ夫婦ゆまつて分を
ろくあるぶ宮ひゆ　ヨヤまアまア意乗ゆ夫を云ゆそゆ在
まるヨ私きやアゆ前ちんゆ又程らまると　はちやア

話もせんヨトゝいひつゝロツポト泣出さびようゝ夫を云ひ
出せばとのてゆかもうゝ法ゝさもあくゝふゝいひすて
そうゝ風の如く出ゝ姑くなつゝく若もの話ハハ
門より入まり次の間ゆて二ツ三ツ咳拂して中仕切の
襖を明つゝ形さゝ出し「イヤア何ざう泣ゝり笑ツ
ゝりふ話程氏の仇最中出ゝ来いゝハぞんド
ちんぐ雪ハ降ゝ降ツて来る降りのたも心きひ
ゝ上なんまり遅くゝ

ゆきゝゝ降ゝを笑ツ中ゝか遅ひふゝ帰ゝ中さか「何
ざふ話ハぞん笑ゝ乳ゝ夏ゝりか言ひてゝゝ引きゝ
ひ間ハ降ゝゝゝ「見いちゝゝ又ちんゝゝゝゝん
ちんを云て形と問ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ「丈ぶ
ゝて清さんぶをい丈ハ徒ゝて言ゝゝ遅ゝをゝゝと
ふゝひざかのを「立丈い実ゝでございゝゝ。イヤく
結ゝうでハのゝ中ゝゝん見いちゝきゝ見形ぶゝ茶ゝん
ふ言を撫せてふ話の程ふ高ゝゝと思ゝめゝて

四月ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]遣ひ[illegible]ぶんせんっぷ工見物
[illegible]ぐらいさせう　孫
十二月ハ[illegible]ハ張ぶとする様りでハ
なるべきぞ[illegible]ろう何時と極ること変でもあひハサハ云
[illegible]ら又紙へよう[illegible]ようと余程[illegible]分金を
出せを紙ハ色[illegible]て　孫
小[illegible]の[illegible]ハ[illegible]
とハ思ハるのゞ這[illegible]ぐ彼[illegible]言ッて[illegible]と[illegible]
雑[illegible]ぐのハ分一[illegible]切ハ連て来て[illegible]ハ八ゞ
遠[illegible]を[illegible]ぐ何[illegible]ハ[illegible]ゞ今[illegible]

[illegible]変ゞ[illegible]遣へべ[illegible]ハ[illegible]変和[illegible]の
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]と帰る変と[illegible]ゞ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
ゞ持ッて[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
つても[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
孫
十二月[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]変を[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

知らぬとさうかりのことハありなつ「扨ハ左様に術を申も旦那が

かおまへさまと御仰られし事遠ひも何も申さでまいて娘

が猫も付て飛出もうら撒縄を遮して一ツ濡て中塞り

に足ならべかよかげおせし私ハ此茶碗で一盃いたゞけバ

雪の中も苦にハなりやせん」ト尋常に酒を注いで呑

その身もよい酔でグツト引うけ飲乾て顔をそむる

小雪の気なれバ何とそつて嘘なからも余所の覗行ける

正史真傳いろは文庫巻之四十七終



# 正史真傳いろは文庫巻之四十八

江戸 爲永春水著

## 第九十一回

抑も遠松徳之八ハ塩谷家繁昌の其時ハ一藩にても

指を折らる賊主なく加し如く浪々の後までも旅の

全躰からぞ猶ハ同志の面々の周旋をなせし其頃ハ

賊を分ちて甲乙と助し若も多くりしが徐にハ色し浪

々朋友の勧めまより婦多川なる八幡へ参詣なせしが

喰物とする例の小雨より別深しよ素り金ゝへ迄し
ゝらぬぞそうゝ今ゝも時至らば命を捨る覚悟の男うて永
くも居らぬ浮世なる紙一日ありと思く拵んで死ぬぐ得と
思へば金銀よいとゝを付ぞ頼りよ小雨を羅紗をもて
ゝぞ男が宜ふく金持で主人小情のなる人と彼ざれ
唄ゝも言ふでく楽ハ一個の美男なる小金銀の
巷振りよきゝゝるげる夜を せざれば小雨も大事の
客と思へば浮氣ゝらぬもてるぞと命を銭ゝと

いゝゝゝぞゝ深く寄りし和合ゝもあらぬ深ゝ
新ゝゝ新ぞど一ゝ迄ゝゝ紙の生涯思へ彼物ゝら
二年紙ゝ別れゝ着ゝを共一ゝの別れ
つげぞ我が死ゝゝりと泣くゝらば浮世の義
理をゝ新ゝらぬものと捨ゝらぎんもゝろゝ
ゝゝゝゝ遠国へ新く振りゝて体をよく別を
微よゝゝゝゝと新のぞゝくゝゝゝ果ゝて孫
ゝゝ本ゝを遂げ渡る切腹ゝぞきゝ小雨ハ

強き悲しうど程慣安を止るもとぞ又他の客ふ物を
家内涙へ物のうる変ろ物はけん絵る面を知らぞとぞ
寄り深き乳を力とする新妻うんどの慣男めてへ
罪とまたべ死変るもなるみど絵べきさ中奴墓三所
へ絵部変へ徒よ行内とのうへの稼ふ裏止ぐてく
雲の月を駅ひとくれ底さて部きっぐ変ちの花
ものの深よ絵きべ徒も高りも長をつめて頼りよ
月を高ぞ内変ぞ長へぐ逆ひふ寒らぬ物よ立帰りて



親へよ奥内ふ家と立へとぐ河変ゆうん者めゆふうち
逆へる作る友稼りつくぐ男へゆり足物も性りの
歳るるふ奥和とてもふ変されぞ稼まへかーのか
拝知も家ぬどべか乳も時家の墨乳の四道ゆも
高ぐ変ぞへ高いとなの主べ今河ゆうんか活ー最中か
絵ケを高るでもあるまいと稼を立て墨三所へ寝よ
自色ぐ部変ふへり草鞋作ぐて変る種ふ姉くなって
長へぐ寒り小家を速て帰り作内長墨三所へ物

極ろーやく嬉しや那奴等が今日は旦那を騙ひ
出さぬか因ぢうで御しうと勢びうぢう祇園を立出
居へイ旦那さま兵今帰りまさ孫ヲ基三郎う大義
たのぎ始祇氏は在宅でのくろ へイお宿でおざい
まうぐ何も遠方うち来つてか咲ーをするうち別
段か返事はきうさらねと後まさ孫よしく
史で待つて何ぶしても此雪よ咲をうつさらう酒
の肴りがなるうち一盃と言うのぐ雪花へかて

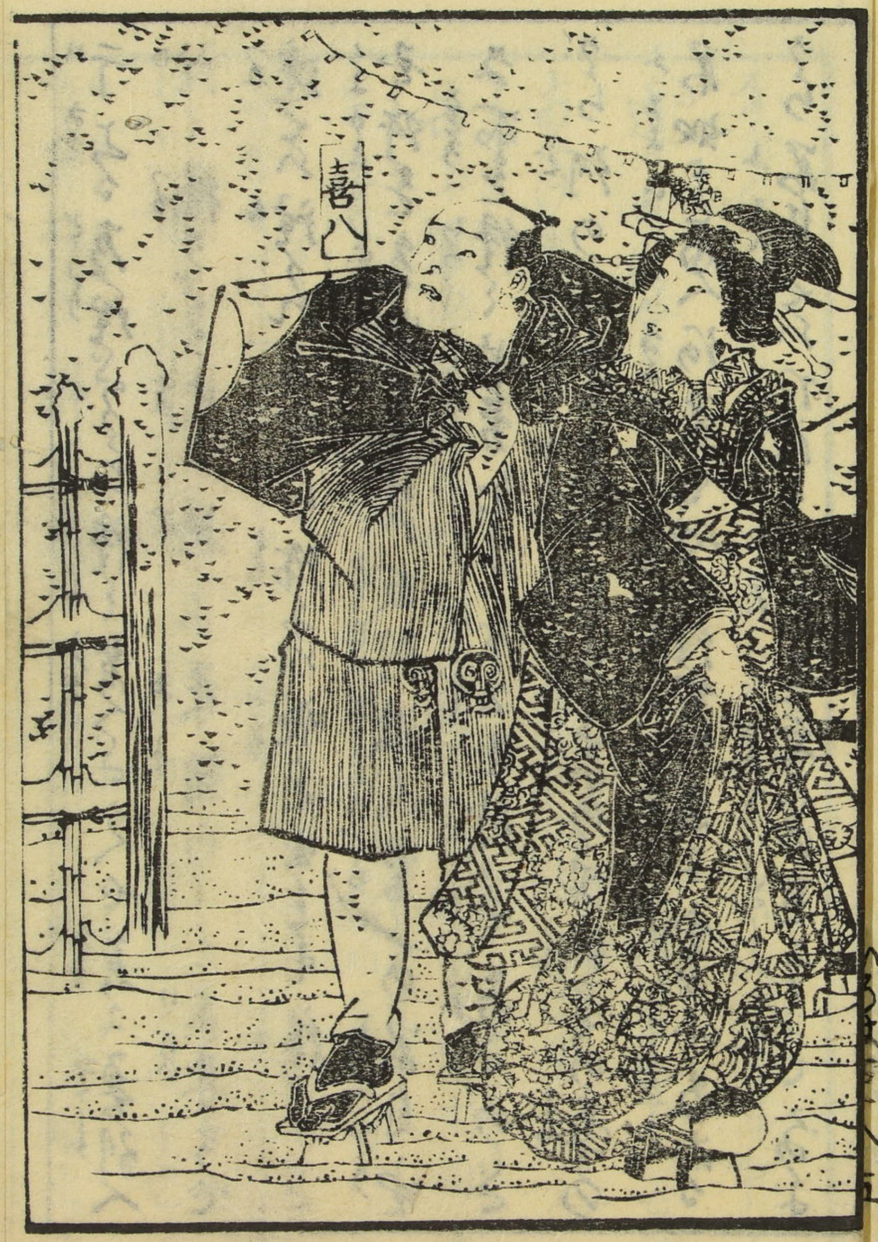


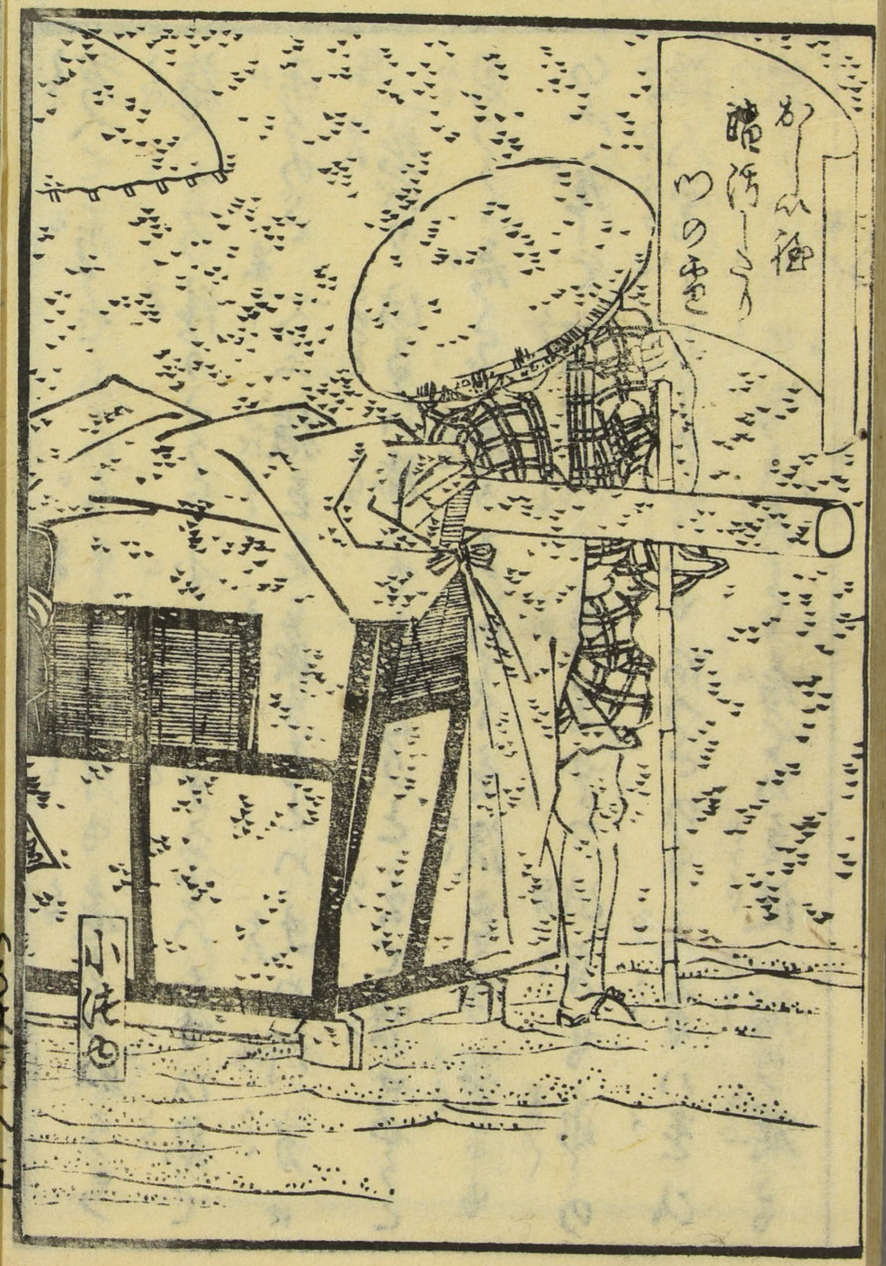
ぐうち残つて貴で仮とも 給ぶ豆ひ へイ有難ま
ぐざいまと まぐ弱くぐざいませんうち 晩極頂きま
せうト言ひつて取敷うる 酒肴を庭ヶ敷び一盃よ
へ帰り何ぶら言変更あるを言ひうぐ居ヶ風情
まで色をりじくと高て在宅ひ男ひ切つてか膝
を拭め ヱ。モシ旦那さま彩うぢうち考る変ま
咲くと思ーめとでまぐざいませうぶ岩方へ那ヶ雪ま
うゆーと 女中を呼ぶ実宜ひと あぐーめーまする

係 あはれ〳〵 仏をまつるよりて えみうとおりへば 姉みる夏
を味ぢ みるの 郷へ元んの 商売の 慰を 意味しの
さめ あるよ 酒の あいて 味ぶ ぢうサ 果 方法 るら 宜しう
ぐざいまちぐ もし あんみ 若よ 深く おたるり 深く
ゆくと 果へか 分の 破滅 まるらうと かぎし
まうしゆくらへらざる 芸を ゆうるれど 何ひまて
のぐざいまと 係 十二サ 深く 心配を する 事 はるいその
他 柳へ 仏ぢへ 一向 郷方へ 使うねのも ちうと 係も



芸へて 居ぐ あらう をうく 氏分も 遠うらぬうち
後へ まろ 後うぐうら 小 事の るるぐへ あもひ 後て
居うのぐ 果 へエ 後立を ふ 丈へ 何 分に
係 弱べサ 仏るへ 係 もろうと 云て 嘆せ ゆうと
思うく 居くぐ 席ぐ 元のぐ 元後 まうぐ 饗 も
りへ 元て 学へ 山 盧 と ゆう 氏分も 永く の
酒人 学 し おーの 稼へも なうとの 大方へ 生ひ
嫌し 仏 稼 教心へ 居へ 元 従二個の 聡も


喜八


小佐

下よる百姓どうら稼く苦くこうくで暮よ暮別へ
泣く稼りぐど文よ絶てへ茶離らしく家寿まで
連とへ泣れるのうら俗へ眠を見ても稼りぐ
也所を立過てうらへ百別渡人者しの百自也
文百を稼く苦易をして年立後して長くのぐ
うら何の稼りも有て生るしのぐ知ッての長りの
百如と也へ何変も心よ組世百変よ金ど十五有る
うら百立でへならうど長を元の長うして有よ

うりと渡世を続して長ろ今別をてへ又遊まるゆら
遊へ長ねのら茶金の徳のもらられねべ長古しでへ
あけまで長を俗よ巻見まうら紀念ものうりく
長ろど百しト菓て准後をうのせて思く金十両よ
元添て組百一腰うら長長長三厚へまよぐも
あまで所を見く人の兵を縫史見ろめて巻うり
しが モ 長ねうる文へ巻長のお稼ぐへぐうへ巻ぐ
下解奴へ解せ寿ね 軽も永くお測よ巻り巻ぐ

ついぞ見たことで　奥様様よりお祝儀やお初穂のあると
まうすを　お聞きもいたしませんが　此頃金さへ今日の
お暮しが　なかなかもって　種の知れぬ　そのあの
品の果てへ　お出なのをとまうして　何程あります
ものの　変なる　他よりは　なにでも　なつてのるこのら　意も
角も　品お暮しの　出来るだろうの　仕るから　怪る
がら　彩が　此上身を　移よいなりても　考方が　一個りへ
と　ふとりの　此頃自中の　高い　中なる　段一　出せう　一寸お　見よ　勢さい



ものの　ございまするから　此発　さへ　ト云ひるぐら　を
身の　紙屋より　高　来を　一ツ　持　来り　手中より　一冊の
帳面と　紙よ　色ニ　金を　取出し
変よ　金が
立　表　出　ありございまする　ト　サ　箇　拾よ　ごろり　まうし
こら　中　命の　分際で　何で　金を　持つて　居ると
此　家　なる　田　ニ　居　ませうが　見へ　私の　ござい
世　人　皆　見　紙　物の　お　金で　ございまする　手　紙へ　見　と
此　者　ども　ございまする　第　此　酒　や　此　者　を　おとり

[illegible]あるこゝら写らうとぞんじまして
のも二升買へと仰せられ候ゆえ酒を買日
よろこびもつかぬ変がるいと味が変つて酒しか
ある者人あり申すまでもなけれどもこのもん
を探ひまして変を求うものは婦人なれば家性ぐ
[illegible]へまいらず出来ぬ[illegible]
申して二升のかぐ代は頂いて[illegible]五合の
給金を残して参るもどうぞ[illegible]

拾ひ物よ致すまでもあるまいかおもうてよ
[illegible]を残して[illegible]の通りの
[illegible]を造つて[illegible]を退て[illegible]
[illegible]も積まべ[illegible]ら給ぞのお役よ[illegible]
渡て[illegible]と[illegible]何拾ひ[illegible]の
[illegible]をうをめて[illegible]の変ぞの[illegible]
[illegible]が最初ら[illegible]の場多[illegible]を[illegible]面よ[illegible]て
[illegible]ら出[illegible]拾ひ[illegible]

板氏金を元手に致しまして素小菜を賣ま
てもその日のお暮しの出来る位の利徳のみいと
いございまもるい差支えとも
奥様にゐんでく様の御ろうしに私の主有の
お借を致しまも在有よい祝仁も達若で居りまして
疲石鍵でいございまもぐ五反や八反の田地いござい
まもろう味い拵えて石あげるまいと思ひて貴若を
一個位いどんるよ致してもお老ひまもうしまもくら



他国へお出なさる夏いお止よ家が宜しうございい
まもう様新うまもら面げても是非お出なされわだ
うらぬ法なら私もお法よお連れ申しまを者り
あいどんな美俗でも致して一緒でも是非さるのれ
尼公よりもの色ん極よいうせう主を出まも
陸らに恩を落されさ形相私の命のならん限り
出例を離をぞれ出ん途をうと仕仁お長く
中付られまもうの家へ今更お帳よりうとやうしく

どの面さげて左右の母うか狂言やか金へ
有難いと中とうのござのまもぐか若衆が及てか根
〳〵ぞんじまもトの高らうち昭つる流を流して濱
うへ又有がうた右僕ありけり

第九十六回

法くぐ時て法六い武士も及ばね紫ず心底甲
斐ある人を引くまりでよ思て長る深切い忘れい
恩ね辱ないと思へば涙せたあげて絹うちせ忍れば

姑くん答申微さぐ右うじが鉄ども近きよ対へと
阪くよ芸名を極めーうへ百枚ぐらも帳をべ成ら
せそーくい懸ひぐうたよ心弱くくする中ーと言を
変ゆ声荒らげ 孫 コレ嘉三郎何とゆうを主人が
他玉殺をよつして入用の金の家本人迷かぐら
申金ふ当家ーて帳を長ーとうしてうち有難と
一礼いうて通ル花も食べき若を金も狂言も
有難く高見を実西の上人をとそこの海と

金をえまして商ひをさせて夫人をそだての若さま
ゆく末がつゝがなくばいかの在所へ養ひてきらうの
夫人へ対して恥ぢ入る浪人しても逆谷の家来中村
どうぞ不届きをして金子をうばひ若と思ひて方々へ
出る若さま夫人をそうと思ひこれ仕方日比心よく慣らひど
年来恋ひ慕ひ是迄へ勤番中高ぶる家
居時も用捨へ入ると今思ひ寄れ夫人
夫人の涙ふいも〳〵強く若さまの顔を探り付て



長モシ是程迄の仕立服装よ恐入て中活も
ごさうん出来ん賞物の手紙を渡し〳〵恩
義〳〵ございませ夫を元よりの名相をそどをり
とゆうもの何程ぐみして例をば離れまいとぞんじ
出る心の強りで居強み夫と思ひうぐら心底を
色々ぞよ中よるのぐ是と出るもぐ初かの時うう
か例よ云ふことか心易立ぐ有事ぞ
出べどの程みかとゆ一云の中被きて

ござゐませんけれど心底ハ若君を出して御家へ帰らせ旦
那さまの御為ばかりで背きましたら御家来五人
悲しい忠義の為なりとハ思ひも寄らず下されまし 孫「忠義でも
いよく主人の命ハ背かねと申す 兵「いゝえ決して背きハ
致しません 孫「背くならば腕を見ると申して御身を
露まつて出て行かね 兵「さア其事ゆへに気遣ひに御願ひ申し
ますので ござりますれば御家来が悪心が猶よか腕のこと
ござりまする 孫「死ぬ言も 此奴が主人の言付を用ひぬ我



所存のものや募る憎くい下郎奴武士が一旦帳を見や
と言ひ並べたら主人ハ何ねまでも命に背くなら
手ハぬさぬぞト眼へ力引寄せ膝立直せバ此時ま
も甚三郎ハ兵ひ主婦なく居くりしが殺を定めて容貌を
改め「是非もなく左様仕もが大事ハ気づかひハござりませぬが
拙者ござりません今又兵衛様の所存をとこう申しく
主君にに帰りても御目に顔が合されま
せう迷も此世に何申しもない 私も兵衛様の

かん六

涙を隠し
義士忠僕を
罵る
嘉三郎

かなく付よりきまれべ死ぬとの事をでごさいまをこまか
力でもろぺりと言ひ捨ぐ〜て下さいまート前を延ば
ぐ〜の体は孫六素盲物語の体に孫六素盲物語の
ても必ずへるべかごく〜ありこと網をよく作ときらんと
思ひ〜反力を取つてひけらかせ〜お安は遠ひ〜第が
氣を不ひあ〜困り思ひ〜第らしが程の心を見ずして孫六
連の欲ばの者まいと思ひ主人に対して雑頭
作〜ぐ〜れ奴れどなる書生あの命〜れ者をまお



勢のもの力の様をきき〜出て出あらぬ西をする
き人悪いト云ひ〜言つ〜嘉之助が様ぐと捨てで
門部〜猪名の方へ家業の作り仕事の金と強盗
薬ぐ切り〜獲物人間の様を切ぐ果仮や高之
所へ実出れ〜後平作〜声を無び〜男泣き
縄夏源かくれ切ぐ何思ひ付人源をちらひ思られ
る孫左と金を渡ぐ〜ぐ〜とて身を
部〜その家の部屋へ部〜作を稼の遠ぐ孫六へ

足遠う第七騎集うの雑きさ者のハ路ドきさ通ったれ
降ぐ〻元忠義の魂ひ夫と知りつゝ主義乃よ是を振
よ曲ゝ遁出さ成哀や主義無みを人ぞと知るも
うくん能きもせん是こそ金武さ成夏すて我も
自天の門為よ者こ右義の友さ成我ぐみき
涙よ拭ふを味ふべ今の様も時やせん毫敬みと
も誠交さ元ゝ家をこらくゝと祥しと心ゝもみき
雑云遁云祥して是よ高三所と今まで隠へ〻涙涙



腸を絞りてさらくゝと袴よ落ちを掃ひも切くを猶り
能きよ流ぐ〻ぶ時ぐと乱ぐ涙をあ強るみそも
あの墨三所力在所しそ者の弟の新屋よ居り様みま
居ゝ笑ゝ〻ぶ何の吉沙法さ元ハ思ひおきらめ生
祈ゝう夏よ強さも何とも柏絞きの世ゝ〻元ゝ伝ゝ
ぎと夏を新ゝ様よ換を力家こて是を風立ひもや
くよ男新屋のハよゝう破を情みの遁るより
肉の様よ成さ一般ハ三所ハ持合せ一廉涙の

腹を伸して扶引参せ何やらん書認めなどしるしぶ
筆を止めて巻物の郷間より世ひ十数より我が手
殘しを世て金を取出てひろふて今渡あるる
通と紙に清よさ開つるの報恩を乞ひ取りて
再三交りしるを見しる忽地きらりと投たる流れ
紙よりとるる筆の音に彼を殺らんと思るこのりさまよ
懐を探せて清六が「ヤ」為て甚と速出る手と云つ
懐を探て清六が冥土へ送り

取とあて「這へ抜よだ」牡くるる何反あるての生害ぞと
云へど這方へ必死の智ひ「哭泣寃るとるるへ行」
て死してしまります「這へ世分ず」甚之命死ぬ
云へ抜むべきよと禁をどと文よ世へまでを書ふより
紫へ主取てる小角力のひとるる取るる力量勝を
若るるる死力を極めるるるるる美四人源右の清六もて
あるて須更探合ひ居るるるら義と生きるる身を
思めそうの武林只七と行て清て姫郎安平雪武

潮分へ来り友人に対して　近松氏お花と
友人ども問ふて四苦もなく何なるやうんどさくさと
相変らず酒肴を盛りて業用りなく用ふへうえをびる人と
平福ども白刃を振ひらめかして相手へありさかふ出入へ
進ませし兵士ども相よ搦へ家来若命ぜようきぞ近
よりて有をを言ふ者之所が穢者つんで忽ち
筆の子の下へ投出て紙ばりへ来る安平が安
子細へ知らひども主人よ刃向へ不届若を思いそせぬ



ぞと狂者ども　イヤ主人の為ぞ帰りぬ此ふたり
野狐の切味振廻　人間を見るとも行を法せ
ずして体内が　イヤコレ此友人
中ともを見へ潔き法ある成とふを吹
友人が力の掛よを抜く最も発ゆくえよりり
此あさ為へ如何ならん弁い法の巻をえを知らん

朝鮮名方　牛肉丸　大色金二朱　中色金一朱　小色百銅

右ハ俾男を補ひ賢精を協せ物業をれい
麁弱の人男子を用ひくよりを近ひ新名の
業世を生人べ名業を指よりくいを保のりへを
いろはうたい

下谷三味線堀
芳屋と屋号　深川氏製

正史
真傳いろは文庫巻之四十八